大津
歴博だより
1995
No.24
OTSU CITY MUSEUM OF HISTORY

孔雀図　吉村孝敬筆　（金台院蔵）

特別陳列

◈近世大津の画人たち◈

1996年1月30日(火)～2月25日(日)

琵琶湖水運の集散港として、また東海道の宿駅として栄えた近世の大津は、東海道五十三次のなかでも最大規模の町でありました。その豊かな経済力のもとに様々な文化や人材が育まれ、また当時の著名な文化人の活躍がありました。

本展は、この近世大津を舞台とした文化のうちから、とくに絵画の世界にスポットをあて、大津における江戸時代の画人をとりあげます。

展示品は、館蔵や寄託の絵画作品が中心ですが、市内の寺院や個人宅に伝来したもの、および市外周辺からも、大津にゆかりの深い画人の作でとくに興味深いものなどについても出陳し、大津の近世文化の一端を紹介いたします。

とくに本展では、園城寺法明院の円山応挙の山水図を、すでに公開されたことのある二面以外にも陳列するほか、他の障壁画についても一部陳列し、法明院障壁画群を紹介いたします。また、紀樸亭、横井金谷の未紹介作品の陳列にも努めるほか、大津祭の曳山に揮毫している景文・豊彦・玉峰など四条派を中心とした京都画壇諸派の作品などもあわせて、約45件を展示する予定です。

特別陳列の内容

☆本展は4つのコーナーから構成しています。

- 法明院障壁画
- 大津の文人画家―楳亭と金谷―
- 京都画壇の大津進出
  ―大津祭曳山と四条派、および諸派の活躍―
- 特別出陳作品

☆主な展示品

孔雀図衝立　吉村孝敬筆　紙本金地著色　一面
縦八八・五　横八〇・八　金台院蔵

吉村孝敬（一七六九～一八三六）は、近江野洲村出身の父、蘭洲とともに親子で応挙門下の絵師として活躍し、応挙の門人ベストテンの一人にあげられています。父の地縁が大津にあったのかは定かではありませんが、孝敬の作品は大津にもいくつか確認されており、この衝立も坂本の里坊に伝わったものです。孔雀図は応挙とその門人にとってお家芸のひとつであり、孝敬描くこの孔雀図も写生の素養を活かした人念な描写による応挙様式の孔雀図となっています。（表紙作品）

鐘馗図　横井金谷筆　紙本淡彩　一幅
縦一五四・〇　横五九・四　京都府立総合資料館蔵

横井金谷（一七六一～一八三二）は浄土宗の僧。諸国を放浪し、「金谷上人御一代記」のようにパロディじみた自伝を著した奇人。与謝蕪村（一七一六～八三）に私淑して南画をよくし、「近江蕪村」と呼ばれています。蕪村風の山水が多い金谷画にあって、この作品は、まさに奇僧金谷の地が出た意表をつく作品。

▲鐘馗図（部分）

山水図襖　円山応挙筆　紙本墨画　四面
縦一七〇・四　横九〇・五　園城寺蔵

円山応挙（一七三三～九五）が「応挙」と名乗る直前の時期、「仙嶺」という名を用いていた明和二年（一七六六）頃（すなわち応挙三三歳）の数少ない遺品です。後補が多くはいっているものの、応挙がすでにこの時期には自己の様式を確立しつつあったことが伺われ貴重な作例となっています。

鳳凰図（大津祭曳山殺生石山衣桁画）
岡本豊彦筆　板絵金地著色　二面
縦二七・〇　横五八・六　柳町自治会所蔵

岡本豊彦（一七七三～一八四五）は、一九世紀の近世京都画壇を風靡した四条派の立役者のひとり。倉敷の出身で、玉島の黒田綾山に師事し、また、大坂の福原五岳（池大雅の弟子）のもとに通うなどして南画を学んでいましたが、上京して呉春につき、写生画派へと転向しました。この鳳凰図の描かれる曳山衣桁は箱書から享和元年（一八〇一）の制作であることが判明しています。この頃、豊彦は二九歳。寛政八年（一七九六）頃の上京から五年目にしての、多数の衆目に触れる晴れがましい仕事であり、神妙に花押も入れています。ちなみにこの曳山の天井画は四条派の若きエース松村景文（一七七九～一八四三）が描いており、四条派旗揚げの感があります。

◀山水図

◀鳳凰図

学芸員のノートから②

葛川谷の平安古像

地域に伝存する文化財の悉皆的な調査のなかから、指定にかかるか否かはさておき、価値ある作品を新たに見いだし、これを展示あるいは報告書等のかたちで紹介していくという作業は、地方博物館の調査研究活動においてきわめて意義あるものと考える。筆者の専攻する日本美術史、就中仏教彫刻史の近年におけるめざましい業績の数々も、このような地道な作業の結果えられた裾野の広がりによって支えられているといえそうである。

このような趣旨から、当館では大津市内に現存する未指定の美術工芸品の調査を継続している。ただ大津には現在宗教法人として存在するものだけで四〇〇をこえる社寺があり、展覧会業務の合間をぬっての調査では、遅々として進まない状況にあることは事実である。大津市約三〇の学区のうち、いちおう全社寺の調査の完了したのは市内最北の葛川学区のみである。寺院では一〇ヶ寺のみの小学区だが、この地域の調査の成果から、三軀の平安古像を紹介することとしたい。

桂昌寺・釈迦如来坐像（図1）

葛川谷の最南部に位置する坂下町の曹洞宗寺院桂昌寺の本尊像である。像高三二・六㌢の小像ながら、写真からもわかるように悠揚せまらぬ大像の風格を感じさせる作品である。構造も古風で、頭・体の幹部はもとより両腰脇部および両前膊部までをふくめ、木心を後方に遠くはずした檜の竪一材から造り、背刳をほどこして背板をあてているが、内刳はあまり深くはなく、あるいは節を抜いたものかもしれない。両脚部も両手先をふくめて木心を左膝横にはずした竪材から造り、内刳はしていない。竪木へのこだわりを感じさせる構造であり、何か由緒ある材を使用した可能性も考えられる。

裳先は欠失し、像表面の漆箔や肉髻珠・白毫・台座・光背にくわえ、両親指先も後補であるが、第二～五指を組み合わせており、いちおう禅定印の釈迦とみてよい。

服制の上では、左肩をおおう大衣のほかにもう一枚の衣を右肩にかけていることが注意される。これはどちらかといえば平安時代には珍しく、鎌倉時代以降に作例の増えてくる着衣法といえよう。

頭・体各部の肉身や足裏部の抑揚にあたたかみがあり、衣文も形式的に並べられはするが、個々の線にやわらかさが感じられる。このような作風は、平安時代も最末期（十二世紀後半）の作例とは一線を画することができるように思われる。小像ゆえに判断はむずかしいが、十二世紀も半ばをくだらない制作と考えたい。

▲図1

明王院・毘沙門天立像（図2）

よく知られた縁起だが、明王院は、慈覚大師円仁の弟子であった相応和尚が、葛川三ノ滝での修業のさなかに感得した不動明王をまつったことにはじまるといい、回峰行の行場として名高い。

昭和三八年には文化財保護委員会の調査がおこなわれ、その成果は『比叡山を中心とする文化財』の中に報告されている。明王院本尊はこのときに国指定重要文化財となった千手観音立像であり、同じく重文の不動明王・毘沙門天像を両脇侍として三尊を構成している。この本尊脇侍の毘沙門天像のほかに、前掲書にはもう一軀の平安時代の毘沙門天像が本堂にまつられていたことを記している。次に紹介する毘沙門天像は、おそらくこれと同じものと考えられる。

像高一〇三・四㌢の立像で、頭部と体部の前面部を竪一材から造り、割首とする。体部背面には左右に二材を矧ぎ寄せ、また体部前面材との間にマチ材をはさんで厚みを増している。頭・体ともに深く内刳をほどこしている。

通常の着甲像だが、頭には垂髻を表し、兜はかぶらない。左手は側方に掲げて宝塔をのせ、右手は垂下して持物の柄を握る。本像のようにやや腰高で、力みのない自然な身のこなしをみせる天部像は、十二世紀も半ば以降にめだってくるように思われる。本像の造立期も、十二世紀半ばから後半にかけての頃とみてよいだろう。

この時期、苛酷な山林修業の聖地としてあった明王院にも、比叡山をおおう門閥主義の風潮はおしよせ、権門出身の検校の相つぐ青蓮院門跡の支配下におかれ

◀図2

た。明王院にも、関白藤原忠通の子であり、四度にわたって天台座主に補任された慈円ら貴顕出身の僧の足跡がめだつようになる。

本像の作風にうかがえる都ぶりも、このような時代背景のもとで考えるべきものかとも思うが、いまただちにこれを結びつけるための直接史料を欠いている。

明王院・千手観音坐像（図3・4）

明王院の護摩堂の一隅に安置される像で、これまでは看過されていたように思われる。現状では、像高六〇・九㌢、髪際高は四六・一㌢。頭・体の幹部は正中線にて左右二材矧ぎとし、三道下で頭・体を割り放つ。さらに別材製の背板を矧ぐ。両脚部に一材を寄せ、両腰脇部に別材を矧ぐ（左は前後二材、右は幹部材との間にマチ材を一材はさむ）。

仏面の下に二段に頭上面を並べるが、仏面のみ当初のものである。脇手もいちおう後補と考えておきたい。台座は完存しないが、蓮華などに古い部分ものこしている。現状の葺き方でいえば、蓮弁どうしの重なりの大きい魚鱗葺の形式である。

後補の漆箔が拙劣で像の表情等をそこなっているが、整斉感のある衣文の刻み方や腰をしぼった細身の体躯、条帛の先端の舌状のたたみ方などに平安後期の特徴をみることができる。

丸みのある脚部の表現は肉感的で、十一～十二世紀の円派仏師の作風に通ずるようにもみえるが、本像の表情には地方性もうかがえ（上記した漆箔のせいもあろうが）、ただちにその作者の系統を云々することはさけたい。

髪の毛筋のやや神経質な彫法や、前述した台座蓮弁の葺き方が当初のそれを伝えているとすれば、平安時代も末に近づいた頃の作と思われ、作風は異なるものの、本堂安置の上記毘沙門天像と、時代的にはほど遠からぬ時期の成立と考える。

ところで明王院は、先にもふれたように相応和尚ゆかりの不動明王の聖地であり、このことは現代にいたるまで変わっていない。葛川と隣接する伊香立庄をはじめとする諸庄との境相論に関する史料として著名な明王院伝来の文書をひもといても、当院が不動明王利生の地であるという主張は中世を通じて一貫しており、本尊は不動明王であるのが自然である。

しかし上述したように、明王院の現在の本尊は比叡山国宝殿に移管安置されている千手観音を中心とした三尊像なのであり、この点についての解明は今後にのこされた大きな課題である。

村山修一氏は、千手観音などの変化観音と毘沙門天をあわせまつるのは奈良朝以来の密教行者特有の信仰であり、はじめ相応が不動明王をまつっていたところへ、この特殊な信仰が導入されたのではないかと推測されている（『修験の世界』）。かりにこれを認めるとしても、その導入の時期、あるいはその歴史的背景などについて何ら明らかにされていないことには変わりがない。

よく知られているように、叡山三塔のひとつ横川首楞厳院の本尊は聖観音像であったが、横川をひらいた慈覚大師円仁は入唐求法の旅の帰途、毘沙門天に海難から救われたことにより、聖観音像の脇に毘沙門天像をまつり、さらに慈恵大師良源のときに不動明王を追加安置し、この天台独特の三尊形式が成立したという（『山門堂舎記』）。この縁起のすべてを史実とみてよいか否かについてはなおも検討の余地があるかもしれないが、遅くとも平安後期も十二世紀になれば、この三尊形式が天台独自のものとして宗内においても認知されていたことは、各地に現存する遺品からみて容易に推測できる。

すでに報告があるように（『天台の秘宝・比叡山』）、明王院本堂の向かって右側の脇壇厨子内後壁の墨書によれば、寛元元年（一二四三）九月十八日に仏閣を建立し、千手観音・不動明王・毘沙門天の三尊を安置したといい、この頃までには千手観音を中心とする三尊を本尊としていたことが確かめられる。上記した明王院の現本尊像は平安末期の作とみられる三尊像だが、中尊千手観音と両脇侍像との間には若干の作風の相違があり、三軀が同時一具のものかどうかについてはただちに確定できない。かりに一具のものであれば、明王院にこの天台系三尊像が本尊として安置された時期は平安末まではさかのぼるといえそうであるし、そうでなければ、寛元元年にいたってはじめて成立した可能性も皆無ではない。

いずれにしても、不動明王の聖地として修験者に喧伝されていたはずの明王院が、新たに千手観音像を本

▲図3

▲図4

尊としてむかえる（あるいは交代させる）ためには、何か歴史的背景の変化があったことが想像される。上述したように、十二世紀になると、延暦寺ないし天台宗の勢力のおよぶ各地の寺院に、不動・毘沙門を脇侍とする三尊像が数多く安置されたように思われ、明王院にもこれと同様の事情を想定するのも一手かもしれない。要するに、深山幽邃の葛川に常住した僧や行者の上に、慈円のように天台宗の中枢部に位置しえた僧侶が実際にこの地に入山してその経営にあたることとなり、それと同時に教団としての統制がおこなわれた。その統制の一環としておこなわれたのが天台宗のシンボルともいえる三尊形式の導入ではなかったか。

いまのところたんなる想像の域を出ない仮説をあえて記したが、今後、諸方面からの検討を継続してゆきたい。

（岩田茂樹）

開館五周年記念講演会「日本の中の近江」開催される

去る一〇月二九日(土)、開館五周年記念講演会リレー講演「日本の中の近江」が開講され、好評のうちに終了しました。

本講演会は、当館が開館五周年を迎えることを記念して開講したもので、田中琢氏（奈良国立文化財研究所長）、西川幸治氏（滋賀県立大学人間文化学部長）、武田恒夫氏（大手前女子大学教授）、森谷尅久氏（武庫川女子大学教授）の四人の先生方をお迎えし、リレー形式で、各時代・各分野での、日本における近江の果たした役割についてお話いただきました。

この中で、田中氏は、考古学における近江の発掘成果を順を追って紹介され、考古学研究を行ううえで、近江が各時代の研究の基礎を築いてきたことを強調されました。次に、西川氏は、近江は地理的・歴史的に、中央と地方とを結びつける位置にあたり、古代から近世にかけて、日本の都市の歴史の中で、常に先駆的、実験的なまちづくりをおこなってきたことを指摘されました。武田氏は、土佐光茂や狩野永徳をはじめとする、絵画史上特筆される近江における絵画の事例を紹介されました。最後に、森谷氏は、近江の検地を例にとり、ユーモアを交え、現代と江戸時代の税制の比較から、江戸時代の制度について語られました。

当日は、一四七名の聴講者があり、先生方のお話を興味深く聴講されました。

今後も、歴史博物館では、今回の五周年記念講演会を節目として、なお一層充実した講座を開講してまいります。ご期待ください。

予告

開館五周年記念特別展「時衆の美術と文芸」

会期：平成八年三月十日～四月十四日

平成七年度最後の展覧会として、「時衆の美術と文芸」展を開催いたします。

今から約七百年の昔、伊予国の豪族河野氏の一族として生まれた一遍智真は、浄土宗西山派の僧について勉学ののち、信濃・善光寺や紀伊・熊野大社などにおける体験を経て、やがて日本全国をひたすら歩き（遊行）、南無阿弥陀仏の六字名号を刷った札を配る（賦算）日々を生涯つづけることとなります。

一遍の後をついで教団としての整備をはかったのが他阿真教で、師の亡きあと遊行を継続しますが、やがて相模・当麻道場（無量光寺）に住み（独住）、遊行上人の地位を第三祖智得にゆずりました。以後、歴代の遊行上人が全国を布教しつづけ、その信奉者は今日では想像もつかないほどの広がりをみせたのです。

かれら遊行に一生を投じた聖とその同行者たちは、当時、時衆と呼ばれました（宗派としての「時宗」は室町後期からの用語）。時衆には、連歌や能をはじめさまざまな職能に長じた者が多かったため、中世を通じ、時衆の文化はつねに日本の文化の中枢に位置していたといっても過言ではありません。

今回の展覧会では、国宝・一遍聖絵などの伝記絵巻や歴代遊行上人の優れた肖像彫刻、また時衆が残した風雅な文芸作品の数々を中心に、約八十件の作品を陳列し、時衆の生み出した豊かな文化遺産を公開します。

同時に、時衆の歴史における近江の国の役割についても紹介します。新たな発見に満ちた展覧会となるはずですので、皆様のご来館をお待ちしています。

れきはくインフォメーション

1月

13 土 親子歴史講座 **凧をつくろう**
○伝統的な凧の作り方によって自分だけの凧を作る
午前13時～15時　講師：田中政之氏（生涯学習センター）

20 土 土曜講座 **大津絵の歴史**
○仏画から大津絵十種の成立までをスライドで解説
午後1時30分～3時

27 土 土曜講座 **近江の弥生時代**
○伊勢遺跡など近江を代表する弥生時代の遺跡を紹介
午後1時30分～3時

2月

3 土 土曜講座 **近世大津の文人画家たち―楳亭・金谷―**
○ともに近江蕪村と呼ばれる大津の文人画家の画業と人生を紹介
午後1時30分～3時

10 土 親子歴史講座 **古代の石器づくりに挑戦**
○石鏃などの石器づくりに挑戦
午前10時～11時30分　講師：横田洋三氏（県文化財保護協会主任技師）

17 土 特別陳列講演会 **―大津と近世京都画壇**
○大津に名品を残す江戸後期京都画壇の活躍を紹介
午後1時30分～3時　講師：田島達也氏（京都文化博物館学芸員）

24 土 土曜講座 **幕末大津をめぐる画人たち**
○幕末大津を舞台に活躍した来章・玉峰・玉純・竹堂ら名画人を紹介
午後1時30分～3時　講師：高梨純次氏（滋賀県立近代美術館学芸主任）

〈特別陳列〉
近世大津の画人たち
1月30日(火)～2月25日(日)

3月

2 土 土曜講座 **絵図による大津町の復元**
○宿場町・港町であった江戸時代の大津町の景観を絵図で再現
午後1時30分～3時

9 土 親子歴史講座 **古代瓦の拓本をとろう**
○遺跡から出土した古代瓦から拓本をとる
午前10時～11時30分

16 土 特別展講演会 **―時衆の美術について**
○仏教美術の権威が時衆の美術を概説
午後1時30分～3時　講師：濱田隆氏（山梨県立美術館長）

23 土 展示品解説 **時衆の美術と文芸**
○中世文化を彩った時衆の美術と文芸の名品をスライドで解説
午後1時30分～3時

〈開館5周年記念特別展〉
時衆の美術と文芸
3月10日(日)～4月14日(日)

※講師名を記していない講座は本館学芸員が担当いたします。
※いずれの講座もハガキにて、お申し込み下さい。

収蔵品紹介㉒

鷺鳥図（しらとず）　**田村直翁（たむらなおおう）筆**　紙本墨画
江戸時代　二曲一隻
縦一一九・五　横五七・五（各扇本紙）
服部新七氏寄贈

桃山時代後期の画壇は巨匠が相次いで輩出した時期でした。信長や秀吉に抱えられていた狩野永徳・狩野山楽ら、狩野派の人物はもとより、海北友松・長谷川等伯・雲谷等顔・曽我直庵らの有力画家が、時の権勢者や寺院の支持を得て、相次いで独自の流派を打ち立てました。今回、ご寄贈をいただいた紙本墨画鷺鳥図は、それらの流派のうち、堺に住した曽我直庵を祖とする堺曽我派の系譜に属する画家の作品です。直庵はとりわけ鷹の絵が評価された画家であったため、以後、堺曽我派は鷹をお家芸としていますが、この作品も、まさに堺曽我派の絵師描く鷹であります。

その絵師の名は、田村直翁。人物の素性などはまだわかっていませんが、直翁の作品の存在はいくつか確認されており、平成元年に奈良県立美術館で開催された「曽我直庵・二直菴の絵画」展では二点の作品が紹介されています。展覧会の担当者の稲畑ルミ子氏は、直翁について、堺曽我派二代目の二直菴を形式化したような作風から、二直菴の周辺絵師ではないかと指摘されています。やはり、この作品も同様の特徴を見せ、印章も奈良県立美術館の出陳作品と一致するようです。堂々とした鷺と鷹の姿を描く一方で、毛描などの細部は入念であり、線描も確かなところに、周辺絵師とは言え、堺曽我派の仕事の水準をうかがわせるものとなっています。これからの研究がまたれる堺曽我派の周辺絵師の作品として貴重なものであり、このような作品を快くご恵贈いただいた服部新七氏には、記して深甚の謝意を表するものであります。（特別陳列出陳作品）

（横谷賢一郎）

大津市歴史博物館
〒520 大津市御陵町2－2　☎（0775）21－2100